

ゲミレル島遺跡（トルコ、リキア地方）と 周辺のビザンティン銘文

益 田 朋 幸

筆者を含む複数大学のメンバーからなる「リキア地方ビザンティン遺跡調査団」（团长 浅野和生、愛知教育大学）は、1991 年以來、トルコ南西部のリキア地方を系統的に調査してきた⁽¹⁾。1995 年からは、ゲミレル島の頂部に位置する「第三聖堂」の発掘に着手し、現在も作業は継続中である⁽²⁾。発掘と周辺調査の過程で、6 世紀を中心とするギリシア語銘文も少なからず発見された。いずれも断片的で、歴史的に重要なものとは言えないが、定型の寄進銘文や祈願銘文が多いという事実そのものが、巡礼地であったと考えられるゲミレル島の性格をよく物語っている。本稿には 1995 - 2002 年の発見をまとめて、今後の分析の第一歩とする。

・ゲミレル島

- A . 第三聖堂

目下発掘中の第三聖堂に関しては、モザイク奉納銘文がもっとも重要である。「島の頂上の聖堂」が聖ニコラオスに捧げられたものであることは、15 世紀の航海案内記と、「アヤ・ニコラ」なる島の通称によって推測されていたが、銘文は間接的ながらもそのことを明らかにした。

第三聖堂石灰岩銘文帯（GIII-103）[1995 年]

発掘に先立つ整地作業によって発見された 3 点（GIII-103,106,109）のうちの一つ。続く GIII-106 と同一の個体ではないが、パレオグラフィは近い。



第三聖堂石灰岩銘文帯 (GIII-106) [1995 年]

GIII-103 と近いパレオグラフィーの建築部材。下部に葉文様の浮彫装飾がついているので、パネル状の建築部材の上端部であったことがわかる。

...ΕΩΖ...
...ΟΥΠΑ...



第三聖堂石灰岩銘文帯 (GIII-658/ 659, 648, 683) [1997 年]

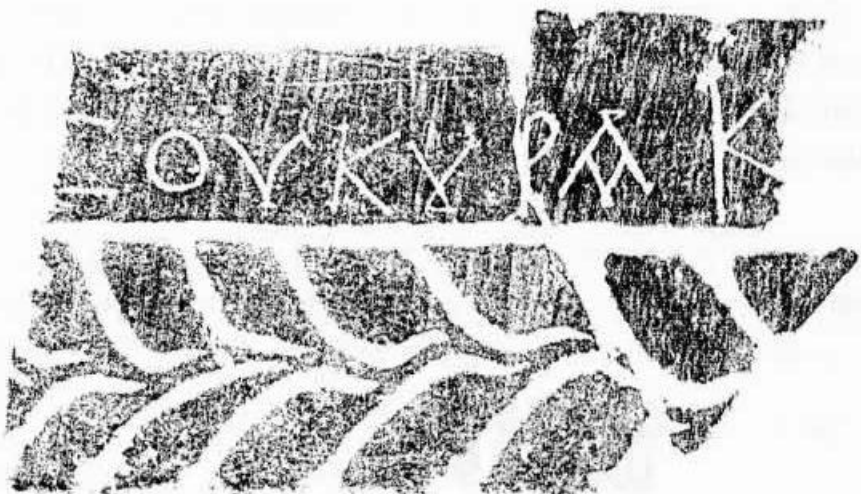
南側廊から発掘された石灰岩の建築部材上端。裏面は磨かれて平らになっている。4 点がこの番号順に接合した。

ΚΥΡΙΑΙΣ ΟΥΧ...
Κύριε, Ἰησοῦ Χριστέ...
主、イエス・キリストよ...

第三聖堂石灰岩銘文帯 (GIII-834, 816) [1999 年]

GIII-658/ 659, 648, 683 等と同様の、石灰岩建築部材上端を走る銘文の一部。

...COYKOYPAK...



第三聖堂石灰岩銘文帯（GIII-2100）[2002 年]

上掲 4 銘文と同様の、葉文様を浮彫にした石灰岩パネル上部の銘。あらかじめ罫線を引いた上で、深い彫りの文字を刻み、刻線の角を整えているプロの文字である。これらの石灰岩パネルがいかなる機能を有していたか今のところ不明であるが、身廊と側廊を分かちスタイロベイトの、角柱間を埋める障柵であった可能性が強い。大型のバシリカでは身廊と側廊のレベルが等しく、円柱間を歩いて行き来が可能である場合が多いが、第三聖堂では、南北側廊のレベルは身廊と等しくない。かつ岩盤を掘り残したスタイロベイトは、床面から 50 センチほどの高さで、その上に石のブロックを積み上げた角柱が並んでいた。地形の制約から、聖堂入口は北壁に設けられ、巡礼者は北側廊を右折して西進し、いったんアトリウムに出てから西正面の扉口を歩いて身廊に導かれたものと考えられる。石灰岩パネルの銘は、聖堂建立の事情等を刻んだ貴重なものであったろうが、残念なことにいずれも断片に過ぎず、意味のある文を読みとれない。



...NAY...



第三聖堂石灰岩銘文帯（GIII-109）[1995 年]

細い銘文帯で、途中で屈曲している。ゲミレル島では稀な、クラシックな書体の銘文で、前稿に発表した大理石銘文断片⁽³⁾と近い。

...OYCAK(α)IHC...

連字：  OY
略字：  kai



第三聖堂大理石祭壇トラペザ銘（GIII-342A, B）[1996 年]

第三聖堂の大理石祭壇トラペザがほとんど完形で発見されたのは、重要である⁽⁴⁾。銘というより、工房のマークのようなものかも知れない。B は上下が不

明である。

(GIII-342A) ΗΓC
(GIII-342B) Ν...

ΗΓC

Ν Χ +

第三聖堂フレスコ銘断片 [1996 年]

発掘区 N2 3 で発見されたフレスコによる銘文の断片。淡い青地にえんじ色で文字が記されている。

C / ΙΩ

第三聖堂大理石銘文断片 (GIII-679) [1997 年]

大理石建築部材奉納銘文の開始。身廊南部分から発掘された。左端は平らに磨かれている。

+Υ...
+ 'Υ [πὲρ ευχῆς ...
への祈りのために...



第三聖堂石灰岩建築部材グラフィット (GIII-601) [1997 年]
石灰岩の磨かれた建築部材表面に、尖筆で刻まれたグラフィット。

KE BO...
KΩ +...
Κ(ύρι)ε, βοήθι...
Κω...
主よ、コ... (コンスタンティノス/
コスマス...)を助けたまえ



第三聖堂大理石テンプロン手すり奉納銘（GIII-878, 880）[1999 年]

第三聖堂では、テンプロンがほぼ復元された。腰板上部に載せられる大理石の手すりに、奉納銘文が刻まれている。書体はクラシックなものであるが、手すり制作と同時に刻まれたものではなく、既製品に後から銘を刻んだものと思われる。鑿がやや雑で、文字の端の線が一部くずれている。ヴィクトールとともに挙げられている人物の名がΕὐで始まっていることが興味深い⁽⁵⁾。

·ΠΕΡΕΥΧΗCΒΙΚΤΟΡΟCΚΑΙΕΥ·
 [+ 'Υ] πὲρ εὐχῆς Βικτόρος καὶ Εὐ·
 ヴィクトールとエウ...の祈りのために



第三聖堂出土陶器銘（GIII-2184）[2002 年]

テラコッタ（原形不明）の断片に、丁寧な訓練された文字が刻まれている。

...AC...



第三聖堂身廊床モザイク奉納銘 [2000 年]

2000 年度の発掘において、身廊の東西トレンチから奉納銘の一部が発見された。トレンチを南北に拡張して銘文全体を発掘した結果、全文が破損なく出土した。身廊の B 区画と C 区画の境界に、タブラ・アンサータ形式によるモザイク奉納銘文 3 行が記される。

ΜΑΚΕΔΩΝΧΡΥCΟΧΟΟCΥΠΕΡCΩΤΗΡΙΑCΕΑΥΤΟΥΚΕ
 ΤΗCΣΥΝΒΙΟΥΑΥΤΟΥΝΟΝΝΗCΚΑΙΤΟΥΑΥΤΩΝΠΕΔΙ
 ΟΥΝΙΚΟΛΑΟΥΤΟΝΟΙΚΟΒΑCΙΛΙΚΟΝΕΨΗΦΩCΕΝ

Μακεδῶν χρυσοχόος ὑπὲρ σωτηρίας εαυτοῦ κὲ τῆς συνβίου
 αὐτοῦ Νουνῆς καὶ τοῦ αὐτῶν πεδίου Νικολάου τὸν οἰκὸ(ν)
 βασιλικὸν ἐψήφωσεν.

マケドニア人の金細工師が、彼自身と、彼の妻ノニアと、彼らの子どもニコラオスの（魂の）救済のために、この聖堂を床モザイクで飾った。

パレオグラフィー： Α Ψ Γ Ε Ο Φ



この銘文については、独立した稿を準備すべく比較例を蒐集中であるが、現時点で考えられる問題点を列挙する⁽⁶⁾。

1) 「マケドニア人」は具体的に何を意味するか。本人の世代にリキアに移住したか、数世代前か。あるいは彼は依然マケドニア在住で、巡礼旅行の途上に寄進を行った可能性も排除しない。しかし新しい史料が発見されない限り、この点に解答が与えられることはないだろう。

2) 「金細工師」の実態、すなわち職人としての地位や経済的な問題。大規模な寄進を行なう財力があつたことは確実だから、単なる一職人ではなく、大工房の経営者だったかも知れない。以上の2点は、類例の蒐集によって、社会的な拡がりをもつ考察ともなり得る。

3) 「マケドニア人の金細工師」という匿名銘の問題。妻ノニア、息子ニコラオスと固有名詞を挙げているのに、本人はあえて匿名とする。この匿名銘の典型は ‘Υπὲρ εὐχῆς καὶ σωτηρίας οὗτο ὄνομα ὁ θεὸς γινώσκει (神その名を知る者の祈りと [魂の] 救いのために) であり、4世紀から7世紀にかけての地中海世界に、ギリシア語、ラテン語 (Cuius nomen Deus scit) を問わず広く見受けられるものである⁽⁷⁾。元来「神その名を知る」は、「天国における第二の名は神が知っている」の意であつたが、やがて、名乗らなくとも神は自分の名を知っていてくださる、というキリスト教的謙譲へと変化した。「神その名を知る者」とせずに「マケドニア人の金細工師」とする、出身と職業のみの匿名銘は

珍しいが、謙讓的匿名銘であることが明らかである⁽⁸⁾。

4) ノニア *Νοννία* という女性名の分布。ノニアという名はそれほど多くないが、小アジアにいくつかの銘文が見られる。とくに以下の銘文では、ノニアという名がマケドニア人という語とともに用いられている点が注目される。

ΔΕΚΛΟΝ τόδε σῆμα τύμβ[ω

ἐπιπῆξε μέγιστον υἱὸς ἀρη-

τῆρος Μ[α]κ[ε]δόνιος Διομή-

δους μνήμην ἑῆς ἀλόχου

Νοννίης πινυτῆς περ ἐ-

ούσης ἢ χάριν κὲ κῦδος⁽⁹⁾

ノニアなる名が特定の地域と結びつくものか、今後の課題である。

5) 「子どもニコラオス」は聖堂が聖ニコラオスに献堂されていることの傍証となる。これまで我々は 15 世紀の航海案内誌 *Portolan* に基づき、また島そのものが「聖ニコラオス島」と現地で通称されていることから、ゲミレル島第三聖堂を聖ニコラオスに献堂されたものと考えてきたが、史料はビザンティン時代に遡るものではなかった⁽¹⁰⁾。銘文によってタイトル聖人が決定されたわけではないが、「子どもニコラオス」との文言は、第三聖堂が「聖ニコラオス聖堂」であったことの傍証となる。「マケドニア人の金細工師」は、一人息子ニコラオスの無事の成長を願って、モザイク施工の費用を寄進した。

6) 「聖堂」を *βασιλικός οἶκός* と呼ぶことの特異性。聖堂は奉獻銘においてさまざまに呼ばれ得る⁽¹¹⁾ が、*βασιλικός οἶκός* との例は寡聞にして知らない。継続して検討したい。

- B . 第三聖堂以外

いずれも発掘と並行して行われたサーヴェイによって発見されたものである。

墳墓 A210 (ゲミレル島第二聖堂東) 墓碑銘 [2001 年]

ヴォールト式墳墓の土台モルタルに尖筆で刻んだ墓碑銘。残念ながら固有名詞は読みとれない。しかし日本隊の調査で発見された、今日まで島唯一の墓碑銘である。ゲミレル島には様々な建築様式による墳墓が多数現存するが、墓碑銘はこれまで発見されなかった。壁体の表面に塗られたモルタルに銘が記されたために破壊されたものと想像したが、この墓碑銘の発見によって傍証が得られたことになる。1 行目は墓碑銘の定型句「ここに眠る」。2 行目はとくに読み

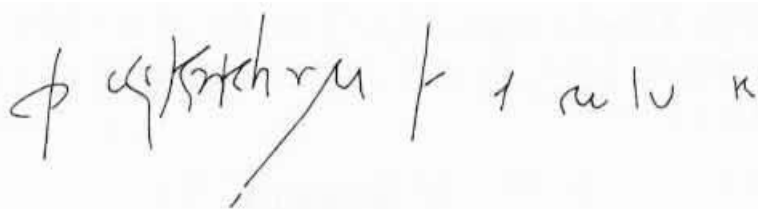
にくいが、行頭をτοι と読むか、τωと読むか。後者であるなら、中央に大きく十字架があり、横腕からω（左）とΑ（右）の釣り装飾が下がっているとも考えられる。

KO[IM]HΘI
TOI (もしくはTΩ) ...AM
ΓΙΑΜΗ...
パレオグラフィー: Α Μ



第二聖堂パストフォリオンのグラフィティ [2001 年]

第二聖堂のアプシス左（北）から、アプシスを回り込むように岩盤を掘ったトンネル状のパストフォリオン（脇祭室）漆喰壁面に、多くのグラフィティが発見され、調査がなされたのは 2001 年であった。多数の船、孔雀、人物像に加えて、「受胎告知」とも見える情景も尖筆で描かれている。これが聖堂と同じく 6 世紀のものであるなら、ビザンティン図像学に新たな資料をもたらす発見となる。中に 1 箇所、ギリシア語の銘文が見られ、φ、κ、η、ν、μ、ωなどのギリシア文字が判読される。残念ながらパレオグラフィーによって年代を判定するにいたらないが、かなり教養を感じさせる流麗な手である。



カヤ村

ゲミレル島の本土側に位置するカヤ村は、かつてギリシア系住民の住むレヴィシであり、6 世紀には島に食物等を供給する拠点と考えられる。調査団によって初めて帝政ローマ時代の碑文が発見され、カルミレソスと呼ばれていた古典古代の活動の痕跡が示された。

聖堂奉献銘 [1995 年]

前稿では、ゲミレル島近くのカヤ村の銘文を可能な限り収録した⁽¹²⁾。古代のカルミレソスがビザンティン時代にレヴィシとなり、住民交換によって廃村カヤとなる歴史は興味深いものである⁽¹³⁾。前稿以後に記録された聖堂奉献銘を 1 点追加する。セルギオス・パスカリディスについては不明。

ΣΕΡΓΙΟΣ ΠΑΣΧΑΛΙΔΗΣ
ΚΤΙΤ Ρ. 1859 ΕΤΕΙ

ドロマイト岩銘文断片 [1997 年]

カヤ村を走る主要な道筋には、共用の井戸が多数つくられている。井戸の土台部にビザンティン時代の柱頭や建築部材が装飾として埋め込まれていて、我々の調査にとっては重要な材料を提供してくれる。おそらくこの断片は、カヤにおける唯一の帝政ローマ碑文である。

· ΜΤΑΥΓ····
Β· ΟC ΧΟΥΚ····
ΑΩΤΕΚΤΟ····
ΩΝΚΤΩΝ····
ΝΟΥΜΕΝ····

パレオグラフィー: Α V Ε Ω Μ

「幼児伝の聖堂」附属墳墓墓碑銘 [1999 年]

カヤ村に残る全聖堂のサーヴェイから発見された銘文。日本チームがこれまで発見した銘文中、唯一年記のあるものである。「幼児伝の聖堂」については、フレスコを中心に既に報告を行っているので、参照されたい⁽¹⁴⁾。墓碑銘は縦 36 センチ、横 50 センチ前後の長方形枠に収められ、枠下端はジグザグの線によって装飾されている。全 5 行のアンシャル体。

Ἐκοιμήθη ὁ δούλος
τοῦ θ[εο]ς(sic) Βασίλειος ·
ἔτους Τλ'ΑΘ' [i]ν[δικτιῶνος] Θ · μηνὶ

Μαρτ[ίω] Λ' (τ)ῆ 'Ηερά Με-
γάλη] Παρασκευή ·

ここに神の僕バシリオス眠る

(世界暦) 6939 年

第 9 インディクティオ

3 月 30 日 聖大金曜日

連字: ΜΗ ΜΗ

ϸ ΟΥ

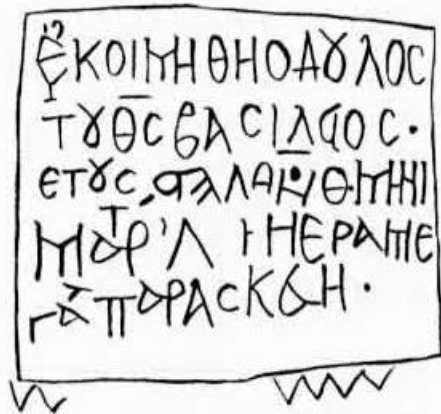
Ϡ ΕΙ

ΜΗΝ ΜΗΝ

Ϡ ΕΥ

略字: Θ̄C θεός

̄N̄ Ινδικτιώνος



世界暦 Annus Mundi 6939 年は西暦 1431 年で、Paschal Cycle は 23、復活祭は 4 月 1 日である⁽¹⁵⁾。従って聖金曜日はこの年、銘文に言う通り 3 月 30 日であった。インディクティオも第 9 で、銘文と一致する。キリストと同じ日に歿したバシリオスの遺族は、あえてそのことを墓碑銘に記したものである。当時すでにこの地はオスマン・トルコ帝国の支配下にあった。首都の滅亡はなお二十余年先のことである。

銘文の書体は不慣れな素人によるものでなく、教養ある人物が記したことを想像させる。全体は大文字体であるが、連字の用い方、時に混じる小文字の筆法はむしろ写本の字体 minuscule を思わせる。冒頭の E 下に附加された装飾モチーフも、写本のイニシャルに起源をもつものであろう。

・その他

ショヴァリエ島ドロマイト岩建築部材断片 [2001 年]

壺状になったフェティエ湾の、口の部分に位置するショヴァリエ島が、戦略上重要な役割を果たしたことは想像に難くない。島には系統だった調査の手が入っていないが、帝政ローマから初期ビザンティンにかけての重要な遺構が無

数にある。島東側の頂上に位置する民家の庭に放置されている、建築部材の銘文を採録する。議会ή βουλήとの語があるが、残念ながら地名部分は欠損している。



フェティエ博物館大理石浮彫エピスティリオン銘文 [1995 年]

日本隊と共同作業をしているフェティエ博物館の収蔵庫には、近隣から運び込まれた多くの遺物が未整理のまま（多くは出自不明で）保管されている。ほとんどが古典古代のものであるが、ビザンティン銘文 2 点を採録する。聖堂テンプロンを構成していたリントル（エピスティリオン）の上部に刻まれた奉納銘である。

...ΑΧΟΝΚΕΝΙΚΙΤΑΝΑΜΑΡΤΟΛΟΝΑΜΙ[N].

...αχον κὲ Νίκιταν ἀμαρτόλον, ἀμίν.

罪深き？ コスとニキタスの（ために）アーメン。

パレオグラフィー： Α Ι Ρ Η Χ

フェティエ博物館石灰岩附柱柱頭奉納銘 [1995 年]

同じくフェティエ博物館収蔵庫のビザンティン銘文。石灰岩製の附柱柱頭に、比較的整った字体で刻まれた奉納銘文である。筆者はかつてゲミレル島第二聖堂北入口の奉納銘に見られるΕὐτυχ...なる人物が、シオン宝物を寄進したリキアの主教エウティキアノスΕὐτυχιανόςではないかとの仮説を述べた⁽¹⁶⁾。この銘文の発見によって、筆者の仮説がくずれるものではないが、同時代の近隣地方

に、寄進を行うことのできる財力をもったΕὐτύχηςなる人物が存在したことは事実である。

ἸΥ ΒΟΗΘΙ
 ΕΥΤΥΧΗΝ
 Ἰ(ησο)ῦ, Βοήθι
 [τὸν] Εὐτύχην.
 イエスよ、エウティキスを
 助けたまえ。
 略字：ἸΥ Ἰησοῦ



エリュデニズ海岸ベルジェクス村聖堂床モザイク奉納銘 [2002 年]

2002 年春のシーズンに、フェティエ博物館はエリュデニズ海岸ベルジェクス Belcekiz 村の聖堂を発掘した。身廊床面はモザイクのテッセラが浮いている状態であったが、ナルテクスから身廊に入る扉口の床モザイクに奉納銘が記されている。2002 年 9 月の時点では左半分のみ出土しており、右半分の上には石のステップが置かれて露出していない。この聖堂はあちこちにローマ時代の建造物のスポリアを用いており、かつてシンボラと呼ばれたエリュデニズ一帯の繁栄を物語る。聖堂建立の年代は 5 世紀に遡る可能性がある。ここにもエウティキオスなる人名が現れた。エウティキス、エウティキオス、エウティキアノスの問題は、今後の発掘の成果を待ちたい。

ΧΡΕΙΥΒΟΗΘΙΤΟΙΣΣΥΝΔΟΤΟΙΣ...
 ΓΙΑΣ (3) ΘΥΕΚΚΛΗΣΙΑΣΕΥΤΥΧΙΩΚ...
 CI (5-7) ΑΚΤΙΩΤΟΙΣΚΕΣΤΕΦΑΝΩΕΡ...

Χρ(ιστ)έ Ἰ(ησο)ῦ, βοήθι τοῖς συνδότοις...
 γιασ... θε(ο)ῦ ἐκκλησίας Εὐτυχίω κ[αί]...
 σι... ακτιώτοις κέ Στεφάνω, Ἐρ...

パレオグラフィー： Δ Ε

略字：ΧΡΕ Χριστέ

ἸΥ Ἰησοῦ

ΘΥ θεοῦ

注

- (1) 第一次報告書は以下である。目下第二次報告書に向けて準備を進めている。*The Survey of Early Byzantine Sites in Ölüdeniz Area (Lycia, Turkey). The First Preliminary Report*, ed. by Sh.Tsuji. 『大阪大学文学部紀要』35 (1995).
- (2) 第一次報告書以降の成果については、以下参照。リキア地方ビザンティン遺跡調査団『聖ニコラオスの島 ゲミレル島（トルコ地中海岸）の発掘調査』、全12頁、1998年；『東地中海の港湾都市遺跡の総合的研究』（平成11-13年度科学研究費補助金 基盤研究(A)(2) 研究成果報告書 課題番号11691017）2002年3月、研究代表者 浅野和生（愛知教育大学教育学部）；浅野和生「聖ニコラオスの島 地中海岸ビザンティン遺跡発掘記」(1)-(6)『SPAZIO』55-59号；Id., “The Excavation of Church III on Gemiler Island (1996 Season),” *XIX Kasi Sonuclar Toplant*, Ankara 1998, pp. 531-540；同「ゲミレル島（トルコ南西部）第三聖堂の発掘」『古代オリエント世界を掘る』古代オリエント博物館、1999年、pp.48-52；Id., “Early Byzantine Site in Ölüdeniz Area, West Lycia,” *100 Jahre Österreichische Forschungen in Ephesos*, Wien 1999, pp.721-723；同「トルコ、ゲミレル島の発掘」『シルクロード学研究叢書』2 (2000)、pp.131-150、シルクロード学研究センター；同「トルコ南西部、ゲミレル島遺跡周辺の発掘・調査」『平成11年第7回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会、2001年、pp.91-95；同「ゲミレル島のビザンティン聖堂群の周歩廊 建築技術の東西交流史に関する試論」『民族芸術』17 (2001)、pp.124-131；Id., “The Survey and Excavation of Gemiler Adasi near Fethiye (1999 Season),” *XVIII Arastirma Sonuclar Toplant*, Ankara 2001, pp. 287-298；同「トルコ地中海沿岸、ゲミレル島発掘調査」『平成12年度第8回西アジア発掘報告会報告集 今よみがえる古代オリエント（2001）』西アジア考古学会、2002年、pp.124-127；益田「トルコにサンタクローズの正体を探る」『ワールド・ミステリー・ツアー13 地中海篇』、同朋舎、1999年、pp.123-138；同「カヤ（トルコ、リキア地方）礼拝堂のビザンティン壁画」『女子美術大学研究紀要』30 (2000)、pp.8-18.
- (3) “Greek Inscriptions in the Ölüdeniz-Gemiler Ada Bay Area,” 『大阪大学文学部紀要』35 (1995)、pp.115f.（以下“Greek Inscriptions”と略称。）
- (4) 数少ない祭壇トラペザの発掘例を含む報告は、以下参照。J.-P. Sodini, K. Kolokotsas, *Aliki, II: la basilique double*, Athens/ Paris 1984, pp.17ff.
- (5) フェティエ博物館蔵の柱頭奉納銘に現れたΕὐτυχῆς参照。
- (6) 以下の内容は、拙稿「ゲミレル島第三聖堂のモザイク」、前掲科研費報告書『東地中海の港湾都市遺跡の総合的研究』、pp.23ff.を踏襲する。

- (7) この匿名銘文については以下参照。L. Robert, in: P. Devambez, *La sanctuaire de Sinuri près de Mylasa*, Paris 1959, pp.45, 103; G. Pugliese- Caratelli, “Cuius Nomen Deus Scit,” *Studi Mediolatini e Volgari*, 1 (1953), pp.193-6; C. Foss, “Two Inscriptions Attributed to the Seventh Century, A.D.,” *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, 25 (1977), pp.282-88.
- (8) 拙稿「ビザンティン初期における『祈り』の概念」『オリエント』38-1 (1995年9月), pp.143-155 参照。
- (9) *MAMA*, vol.1, no.370.
- (10) 拙稿「聖ニコラオスたちの島」『地中海学研究』17 (1994), esp. p.32.
- (11) 拙稿「岡山市立オリエント美術館蔵ビザンティン銘文とシリアの建築家マルキアノス・キリス」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』12 (1993), esp. p.6.
- (12) “Greek Inscriptions,” pp.127-31.
- (13) 将来の報告書において、大月康弘氏がカヤの歴史に関する報告を執筆予定である。これまでのところは 大月「レヴィシオン村（現カヤ村）住民の移住と生活」参照。前掲科 研費報告書『東地中海の港湾都市遺跡の総合的研究』、pp.34ff..
- (14) 「カヤ（トルコ、リキア地方）礼拝堂のビザンティン壁画」（注2）。
- (15) V. Grumel, *La chronologie (Traité d'études byzantines I)*, Paris 1958, pp.266ff..
- (16) “Greek Inscriptions,” pp.114f.; 「聖ニコラオスたちの島」（注10）, pp.28ff.; “The Cult of St. Nicholas in Sixth-Century Lycia”『ユーフラテスの彼方シルクロードを辿る』（大阪大学五十周年記念事業 国際シンポジウム基調講演）1996年、pp.40-6.